スンドラ・チョクの神像と空間意匠

ネパールの王宮における中庭建築の研究 その5

GOD IMAGE AND SPACE DESIGN OF SUNDARA CHOK
Quadrangle Architecture of the Royal Buildings of Nepal Part 5黒津 高行*
Takayuki KUROTSU

This paper is the part five of the research in Chok (quadrangle) architecture of the royal buildings of Nepal. In this paper, space design and significance of the space of *Sundara Chok* which were typical patterns of Chok architecture of it were examined, on the basis of god images with struts located in a courtyard.

As the result, we were able to draw out the following conclusion.

Design of *Sundara Chok* showed a watering place by pictorial images of Hindu gods and goddesses centering on *Viṣṇu* and a sacred place by pictorial images of the diety of heavenly body. It is an architectural space to embody the Hindu cosmos. This space was designed to win devine favor of *Viṣṇu* with the power to maintain the older of the world and, at the same time, it was Malla king's own Hindu cosmos. In other words, *Sundara Chok* was an informal architectural space that the king could become one with the gods routinely, and was a private place that embodied the continuation of peaceful reign of the Malla royal family.

Keywords : Nepal, royal building, *Sundara Chok*, space design, god image

ネパール, 王宮建築, スンドラ・チョク, 空間意匠, 神像彫刻

1. 序

本稿は、ネパールにおける王宮建築の重要な構成要素である中庭建築について、その成立発展過程および建築の特質を明らかにすることを目的とした研究の、第5稿である。

ネパールの王宮建築は、ムール・チョク、スンドラ・チョクなど、中庭を囲む形式の建築であるチョク建築を主要な構成要素とする複合体である。チョク建築については、遺構と史料を合わせて総合的に捉え、その構造・機能・平面設計概念の各側面から検討してきた¹⁾。さらに前稿²⁾では、方杖に付く神々の像をチョク建築の機能の違いを充たす意匠上の主要な要素として捉え、神像が建築空間に付与する意味を、チョク建築が最も簡明な形で存在し伝統的な計画で設計されているムール・チョクを例に検討した。その結果、この建築はドゥルガーの神話を主題とした図像を中心に表現したもので、マッラ王家の守護神を祀る空間であること、この建築空間は偉大な力を持つ大母神ドゥルガーの恩寵を受けようと意図しており、ムール・チョクは意匠上も、文字どおり最も主

要な建築であったことを明らかにした。

この稿においては、スンドラ・チョクの意匠について、意匠上の特徴をもたらす方杖に付く神像と水場の神像を検討し、スンドラ・チョクの建築空間の意味を論じる³⁾。

2. バタン王宮スンドラ・チョクの方杖神像と

水場の神像

1) 方杖神像・方立て神像

バタン王宮スンドラ・チョクの方杖は、中庭西面・北面・東面・南面と、王宮広場に面する西棟正面および南棟正面に付いている。中庭各面の方杖は3階のバルコニーを受けており、その上にバルコニーの方立てを立て軒先を支持している。この方杖と方立てには神々の像を刻み、王宮広場側の方杖には龍の丸彫りを施している。

中庭各面の方杖と方立ては、像が板幅に納った浮彫りの神像と、浮彫りまたは丸彫りの神獣の2種を用いている。中庭の方杖神像は西・北・東・南の各面にそれぞれ10本付いており、方立ては6本づつ立てている。また、各面中央の突出した壁の両端にも方杖が付き、その上に

* 日本工業大学工学部建築学科 講師・工博

Lecturer, Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Nippon Institute of Technology, Dr. Eng.

表一 バタン王宮スングラ・チョク中庭の方杖神像の形態的特徴とその神格

番号	位置	形相	顔の 手の数	姿勢	体の色	乗物	持物		その他の特徴	神格	神格グループ
							右手	左手			
1 2	中庭南面 中庭南面	柔和 柔和	1面2臂 1面2臂	開脚 開脚	青白	蓮華座				女神 女神	
3	中庭南面	獸			緑				角・翼	ヤーリ	
4 5 6 7 8 9	中庭南面 中庭南面 中庭南面 中庭南面 中庭南面 中庭南面	柔和 忿怒 柔和 柔和 柔和 柔和	1面4臂 1面2臂 1面2臂 1面2臂 1面2臂 1面2臂	開脚 開脚 開脚 開脚 開脚 開脚	赤青 赤青 赤青 赤青 赤青 赤青	牛 天秤 天台・火炎 天台 天台		劍 盾・短槍		牛に乗る女神 パイラヴァ 天秤に乗る女神 台に乗る女神 ラーブ 台に乗る女神	星宿 九曜
10	中庭南面	獸			黄				角・翼	ヤーリ	
11 12	中庭南面 中庭南面	柔和 柔和	1面2臂 1面2臂	開脚 開脚	白青	獅子				獅子に乗る女神 女神	星宿
13	南西入隅	獸			白				角・翼	ヤーリ	
14 15	中庭西面 中庭西面	忿怒 柔和	1面8臂 1面2臂	開脚 開脚	黄青	鼠水瓶				パイラヴァ 水瓶に乗る女神	星宿
16	中庭西面	獸			青				角・翼	ヤーリ	
17 18 19 20 21 22	中庭西面 中庭西面 中庭西面 中庭西面 中庭西面 中庭西面	柔和 柔和 忿怒 忿怒 忿怒 柔和	1面2臂 1面2臂 1面8臂 1面2臂 1面2臂 1面2臂	開脚 開脚 開脚 開脚 開脚 開脚	白赤 白赤 白赤 白赤 白赤 白赤	馬 台ガルダ鳥 人馬 人馬 人馬 人馬			頭上に旗	シュクラ(金曜) 台に乗る女神 パイラヴァ 人に乗る女神 パイラヴァ 人に乗る女神	九曜
23	中庭西面	獸			白				角・翼	ヤーリ	
24 25	中庭西面 中庭西面	柔和 柔和	1面2臂 3面2臂	開脚 開脚	緑白	蓮華座 蓮華座				ブダ(水曜) ブダ(水曜)	九曜 九曜
26	北西入隅	獸			白				角・翼	ヤーリ	
27 28	中庭北面 中庭北面	柔和 柔和	1面2臂 1面2臂	開脚 開脚	青白	ハンサ鳥 馬			蓮華 蓮華	ソマ(月曜) スーリヤ(日曜)	九曜 九曜
29	中庭北面	獸			緑				角・翼	ヤーリ	
30 31 32 33 34 35	中庭北面 中庭北面 中庭北面 中庭北面 中庭北面 中庭北面	柔和 柔和 柔和 柔和 柔和 柔和	1面2臂 1面2臂 1面2臂 1面2臂 1面2臂 1面2臂	開脚 開脚 開脚 開脚 開脚 開脚	白 白 白 白 白 白	牛 獅子 象 ハンサ鳥 台		三叉戟		牛に乗る女神 獅子に乗る女神 ブリスパティ(水曜) ソマ(月曜) 台に乗る女神 ヤーリ	星宿 星宿 九曜 九曜 九曜
36	中庭北面	獸			白				角・翼	ヤーリ	
37 38	中庭北面 中庭北面	柔和 柔和	1面2臂 1面2臂	開脚 開脚	白	鳥 台				鳥に乗る女神 台に乗る女神	
39	中庭北面	獸			白				角・翼	ヤーリ	
40 41	中庭東面 中庭東面	柔和 柔和	1面2臂 1面4臂	開脚 開脚	白緑	牛 獅子	劍	盾		牛に乗る女神 獅子に乗る女神	星宿 星宿
42	中庭東面	獸			青				角・翼	ヤーリ	
43 44 45 46 47 48	中庭東面 中庭東面 中庭東面 中庭東面 中庭東面 中庭東面	柔和 柔和 柔和 柔和 柔和 柔和	1面2臂 1面4臂 1面2臂 1面2臂 1面2臂 1面2臂	開脚 開脚 開脚 開脚 開脚 開脚	白 白 白 白 白 白	山羊 マラカ 蓮華座 蓮華座 蓮華座 蓮華座				マンガラ(火曜) ケートウ ブダ(水曜) シャナイシュカラ(土曜) ブダ(水曜) 女神	九曜 九曜 九曜 九曜 九曜
49	中庭東面	獸			白				角・翼	ヤーリ	
50 51	中庭東面 中庭東面	柔和 柔和	1面2臂 1面4臂	開脚 開脚	白緑	人 孔雀			頭上に旗	人に乗る女神 カウマーリー	八母神
52	南東入隅	獸			黄				角・翼	ヤーリ	

方杖神像番号

図一 ラーフ（日月食の神）の方杖
（パタン王宮スングラ・チョク中庭南面・No. 8）

図一3 スーリヤ（日曜）の方杖
（パタン王宮スングラ・チョク中庭北面・No. 28）

図一2 パタン王宮スングラ・チョクの方杖神像・方立て神像の配置

方立てを立面上 135°の方向に立てている。

ここでは、方杖に刻まれる神像の意匠について、バルコニーの方立てを含めて検討する。神像の比定については、前稿のムール・チョクと同様に神像の形態的特徴を抽出し、彫刻・仏画などに表現されている、神路の図像上の特徴と照合する方法をとっている（表—1）。

例えば、中庭南面の No.8 の神像の乗物は台座で、その上には火炎を表現する（図—1）。持物は剣である。この図像は、ネパールの国立美術館に所蔵されている「長寿の祝いの図」⁴⁾に描かれた日月食の神ラーフの特徴と一致する。したがって、この方杖神像は、宇宙空間の天体を神格化した九曜の一つであるラーフと考えられる。

このように、スングラ・チョクの方杖に彫刻された神像の神格をそれぞれ比定したのが図—2 である。

まず、バルコニーを支持する方杖をみると、天体を神格化した九曜が 13 体確認できる。中庭西面には、蓮華に乗るブタ（水曜）、馬に乗るシュクラ（金曜）、北面には、蓮華を持ち馬に乗るスーリヤ（日曜）（図—3）、蓮華を持ちハンサ鳥に乗るソマ（月曜）、象に乗るプリハスバティ（木曜）、東面には、山羊に乗るマンガラ（火曜）、ブタ、亀に乗るシャナイシュカラ（土曜）、神話上の海獣マカラに乗るケートゥ（隕石の神）、南面には、火炎から出現したラーフ（日月食の神）が付く。

また、水瓶に乗る女神、獅子に乗る女神、天秤に乗る女神がみられ、これが、それぞれの星座を司る神格を表現していると推測される。このほかの神像も、柔和な形相を持つ二臂の女神であり、九曜とほぼ同様の図像となっている。これらの神像は中庭の同一面に九曜と共に配置されるから、これらも星座の神格すなわち星宿の可能性が高い⁵⁾。

したがって、パタン王宮スングラ・チョク中庭の方杖神像は、太陽、月、惑星、彗星、星座などの天体の神格であると考えられる。この点は、ヒンドゥーの主要な神を図像化したムール・チョク中庭の方杖神像とは異なっている。

次に、バルコニーの方立てをみると、八母神の構成員が 15 体確認できる。中庭西面にはヴァーラーヒー、北面にはチャームンダー、ヴァイシュナヴィー、インドラーニー、東面にはチャームンダー、インドラーニー、ヴァイシュナヴィー、南面にはカウマーリーが付く。

ただ、各面の方立て神像は 6 本であるから、各面毎に 8 人の母神がグループを構成することはない。また、この八母神の構成員は、パタン王宮ムール・チョクでみられたようにバイラヴァと対をなしていない。これは、ムール・チョクと異なる点である。

これら以外の方立ては、八母神の構成員と同様の図像をとる女神であるから、これらも母神と判断できる。なお、各方立ての下部には、いずれも鉢を持つ女を刻んで

図—4 ヴィシュヌとその妃ラクシュミー
（パタン王宮スングラ・チョク水場北面）

おり、それぞれの母神に仕える従者を表現すると考えられる。

すなわち、パタン王宮スングラ・チョク中庭のバルコニーに付く方立て神像は、八母神の構成員としての神々を図像化したものである⁶⁾。

2) 水場の神像

中庭の中ほどには、王の玉座とされる石台があり、2本の石柱を介して、その北側前方に円形の水場を穿つ。水場には、石造の神像を施している。水場の壁面は八面からなり、北側の正面に金色の蛇口スン・ダラを付け、南側の背面に階段を設けている。なお、水場の北側正面の上部中庭床面にはシカラ形式の小さな祠を置いている。

このスン・ダラには、ガルダに乗るヴィシュヌとその妃ラクシュミーを付けており、これを真鍮でつくっている（図—4）。また、水場の壁面には樹木の彫刻を施し、その幹間に壁龕をつくっている。各面の壁龕には、ヴィシュヌとその化身、シヴァ、パライヴァ、ガネーシャなどをその妃と共に配していることが、神像の特徴からわかる。また、チャームンダー、カウマーリーなどの八母神と、ハーリーティ、ドゥルガーの女神なども認められる。このチョクの水場の神像には、男女神一対のものが多く、小さな空間に多くの神々を表現している。

すなわち、パタン王宮スングラ・チョク水場の神像は、ヒンドゥーの主要な神を図像化したもので、それらの神像で囲まれる水場の空間は、ヴィシュヌを中心としたヒンドゥーのパンテオンと考えられる。

3. スングラ・チョクの方杖神像および水場の神像にみる建築空間の意味

1) 宇宙の象徴化

パタン王宮スングラ・チョク中庭の方杖神像は、前述のとおり九曜などの星宿と考えられる。その上に付く方立てには、天空の支配者としての役割を持つ⁷⁾とされて

いる八母神を刻む。八母神は特定の星と関係を持ち、太陰暦の特定の曜日を統括するから、九曜と強く係わっている。これらの神は、中庭を囲む3階バルコニーに付き、中庭を見降ろす高い位置に配されているから、スンドラ・チョク中庭の閉じた建築空間は、宇宙を象徴すると理解できる。その中核には、水場のヴィシュヌが置かれ、これを天体の神格と八母神が囲んでいる。

天体の神格は宇宙の縮図としてのマンダラ⁸⁾にも表現され、中心神を囲んで宇宙の枠組みをつくっている。スンドラ・チョク中庭の平面構成は、概念的にマンダラの形と類似するから、スンドラ・チョクはマンダラ的な建築として捉えることができる。

また、スンドラ・チョク中庭がヴィシュヌを中心に構成されるのは、ヴィシュヌの性格に由来すると考えられる。このヒンドゥーの最高神は、太陽を擬人化したものと一般に考えられており、全世界を活動領域とし、宇宙を創造し、万物を支配する神とされている⁹⁾。

すなわち、スンドラ・チョク中庭の建築空間は、天体の神格を方杖に図像化することにより、ヴィシュヌが秩序を維持するとみられている宇宙を象徴したものであるといえる。

2) 生の守護神とヒンドゥー世界の象徴化

次に、パタン王宮スンドラ・チョクの水場にヴィシュヌを捉えている意味を述べる。

水は生を与える源であり、水の象徴は水底に棲む蛇ナーガであるとされる¹⁰⁾。このナーガを征服した神がヴィシュヌであり、神話上で活躍する。この物語は、鳥の王ガルダに乗ったヴィシュヌが飛来し、湖に棲むナーガに捕えられた象を救助するもので¹¹⁾、その図像は、中インドのデオーガルにあるダシャーヴァターラ寺の6世紀初めの石彫¹²⁾に見られる。

パタン王宮の場合、スンドラ・チョク水場の北側正面中央には、人身のガルダに乗るヴィシュヌを、その下には二頭の象を刻んでいる。この図像は上記の神話に因むものと推測される。ヴィシュヌは、金色の蛇口スンドラに置かれるから、この神が、生を維持する力を持つ水を司っている表現とみられる¹³⁾。また、水場の周囲には水の象徴である蛇神ナーガを従えるから、生の守護神として水場にヴィシュヌの神像を捉えていると考えられる。二匹の大蛇ナーガは水場を囲み、鎌首を上げて南面を向くから、この場合の水場の守護神はやはりナーガである。

ヴィシュヌは万物を支配するヒンドゥーの最高神であるから、この神が、水場に図像化されたヒンドゥーの神々を制御して、この空間を支配しているとみることができ。水場壁面の意匠をみると、これらの神々が林立する樹木の中に一堂に会して並んでおり、神々の棲をここに凝縮して表現している。さらに、水場の中庭床面にはナー

ガを水場側に正面を向けて円状に配し、その外側を二匹の大蛇で囲んでいる。これが中庭と水場の境界となり、神の棲をより神聖なものとしている。

したがって、この水場の空間はヒンドゥーの神の世界を象徴していると考えられる。マッラ王は、この水場で朝の沐浴礼拝を日常的に行なっていたとみられ、玉座に昇り祈ったと推測されるから、人間の運命を司るヴィシュヌを、生の源である水場に置いて礼拝供養することによって、この神と同化しようとしたと推測される。

このチョクの水場はマッラ王の私的な沐浴礼拝の場であり、その儀礼は王の日常生活の一部であったから、公的な宗教性が高いムール・チョク中庭の建築空間とは異なるものである。

4. 結

スンドラ・チョクは、ヴィシュヌを中心とするヒンドゥーの神々の図像を水場に、天体の神格の図像を方杖に表現したもので、ヒンドゥー宇宙を具現する建築空間である。

スンドラ・チョクは、ムール・チョクの創建後、居住施設としてつくられ、17世紀半ばにはこのチョクの中庭に水場を取り込んでいる。この建築は、円形の水場にヒンドゥーの神々の世界を象徴し、その廻りを囲む正方形中庭に天体を神格化した神々を整然と並べ、ヒンドゥー宇宙を具現する。そして、ここを王の日常的な沐浴礼拝の場として用いた。王は、王宮の生活の場に水場を穿ち、ここにヴィシュヌを取り込んで、王家の平安を祈願した。すなわち、建物全体が一つの立体マンダラ的な建築として捉えられる。

スンドラ・チョクの建築空間は、ヴィシュヌが持つ世界の秩序を維持する力の恩寵を受けようと意図しているもので、同時にマッラ王自身のヒンドゥー宇宙でもあった。すなわち、スンドラ・チョクは、王が神と日常的に同化することが可能な空間であり、マッラ王家の治世安泰の存続を意匠的に具現化した私的な空間であった。

なお、この研究は日本工業大学を中心とするネパール王国古王宮調査団による現地調査の成果に基づくものである。調査に際しては、ネパール王国政府、とくに教育省考古局のご協力を得たことを記し、深く感謝したい。また、文部省科学研究費補助金を得たことを付記する。

注

- 1) 黒津高行、渡辺勝彦：チョク建築の構造（ネパールの王宮における中庭建築の研究その1）、日本建築学会計画系論文報告集、No.408、pp.101～109、1990年2月
 拙稿：チョク建築の機能（ネパールの王宮における中庭建築の研究その2）、日本建築学会計画系論文報告集、No.412、pp.97～107、1990年6月
 拙稿：チョク建築の平面設計概念（ネパールの王宮にお

ける中庭建築の研究その3), 日本建築学会計画系論文報告集, No. 426, pp. 149~156, 1991年8月

- 2) 拙稿: ムール・チョクの神像と空間意匠 (ネパールの王宮における中庭建築の研究その4), 日本建築学会計画系論文報告集, No. 441, pp. 125~132, 1992年11月
- 3) 本稿の一部は, 1991年度日本建築学会関東支部研究報告集 (ネパールのバタン王宮スングラ・チョクの方杖神像と水場の神像について, pp. 289~292), および日本工業大学研究報告別巻 91-02号 (ネパールの王宮における中庭建築の復原的研究, 1991年9月) に発表している。
- 4) 立川武蔵: 曼荼羅の神々, 所収図, ありな書房, p. 135, 1987年
なお, 方杖の神格は主に神像の乗物から比定した。
- 5) バイラヴァやカウマリーの方杖神像もみられるが, 受け材に比べて板幅が広く, 方杖の上下を切断しているから転用材と判断できる。本来は, この部分にも星宿を表現する方杖を付けていたと推測される。
- 6) バルコニーの短い方立てには, クリシュナ神話 (立川武蔵・石黒 淳, 菱田邦男, 島 岩: ヒンドゥーの神々, せりか書房, pp. 68~73, 1986年) の図像が表現されて

図—5 バタン王宮スングラ・チョク中庭にみるクリシュナ神話の神像の配置

いる。図—5に示すとおり, 中庭東面の北から南の順に, クリシュナと馬の姿をした魔神ケースィン, 一つおいて, 笛を吹くクリシュナ, ゴーヴァルダナ山を片手で持ち上げるクリシュナ, クリシュナとその妃ラーダー, バターを盗むクリシュナ, 踊るクリシュナを付ける。さらに中庭南面の西端には, ヤムナー河で水浴をする牧女たちの衣類を隠してしまうクリシュナを, それぞれ図像化している。主に, 幼少のクリシュナの神話を主題としたものを方立てに表現し, クリシュナの非凡な才能を象徴し, 崇めたと考えられる。

また, カトマンズ王宮スングラ・チョクでも, 幼少のクリシュナ神話を主題とした石像を置いている。これは, プラタープ・マッラ王が王宮の外から移設したと伝えられる (Daniel Wright, *History of Nepal translated from the Parbatiya*, Cambridge, 1877, Kathmandu, p. 215, reprint 1972), リッチャヴィ王朝時代のカーリーヤダマナと呼ばれる7世紀 (Pratapaditya Pal, *The Arts of Nepal*, Vol. 1, Leiden, pp. 66~67, pl. 90, 91, 1974) の石像である。

この像は, 幼少のクリシュナが悪行するヤムナー河の王カーリヤ龍 (ナーガ) を, 思い通りにあやつり制圧する様子を表現している。当時は各国の争いの絶えなかった時代であったから, 王はカトマンズ・マッラの治世安泰を祈念して, クリシュナの武勇伝神話の主題とした像を礼拝対象物としてチョク内に取り込み, クリシュナの非凡な力の恩寵を受けようとしたと理解できる。

すなわち, クリシュナはヴィシュヌの化身の一人であり, 同一視されるから, ヴィシュヌを中心神とするスングラ・チョクにクリシュナを図像化したと考えられる。

- 7) Mary Shepherd Slusser, *Nepal Mandala*, Vol. 1, Princeton, p. 344, 1982
- 8) 立川前掲書 注4) 所収図, ありな書房, pp. 164~170「法界語自在マンドラ」1987
- 9) 徳永宗雄: ヴィシュヌ教諸派, インド思想 2, 岩波書店, pp. 97~98, 1988年
- 10) ハインリッヒ・ツィンマー, 宮元啓一訳: インド・アート—神話と象徴, せりか書房, pp. 89~90, 1988年
- 11) 立川前掲書 注6) p. 73
- 12) 宮治 昭: インド美術史, 吉川弘文館, p. 1, 昭和56年
- 13) 北側正面中央の祠は金色の蛇口スングラ上部の同一軸線上に据えられており, この水場の機能から判断すると, ヴィシュヌ (またはクリシュナ) を祀るための施設とみてよい。

(1992年11月10日原稿受理, 1993年2月2日採用決定)